「キリストの嘆き」 2023 年 2 月 5 日詩編 61 編 1 節～９節

【指揮者によって。伴奏付き。ダビデの詩。】

神よ、わたしの叫びを聞き わたしの祈りに耳を傾けてください。心が挫けるとき 地の果てからあなたを呼びます。高くそびえる岩山の上に わたしを導いてください。あなたは常にわたしの避けどころ 敵に対する力強い塔となってくださいます。あなたの幕屋にわたしはとこしえに宿り あなたの翼を避けどころとして隠れます。

神よ、あなたは必ずわたしの誓願を聞き取り 御名を畏れる人に 継ぐべきものをお与えになります。王の日々になお日々を加え その年月を代々に永らえさせてください。王が神の前にあってとこしえの王座につき 慈し

みとまことに守られますように。わたしは永遠にあなたの御名をほめ歌い 日ごとに満願の献げ物をささげます。

ルカによる福音書 １３章３１節～３５節ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」 イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。 エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。 見よ、お前たちの家は見捨てられる。言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」

１， ファリサイ派の人々の勧め

「ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。』」主イエスと対立していた人々の中心に、ファリサイ派という人々がおりました。彼らは、誰よりも神の掟である律法を正しく守ることを通して信仰を貫こうとしていたまじめな人たちでした。しかしその中に見え隠れする偽善を主イエスに厳しくとがめられたことによって、主イエスを疎んじ、対立していたのでした。しかし、ここでは彼らは、権力者であるヘロデ・アンティパスから命を狙われていることを親切にも、告げているのです。主イエスを助けようとしているのです。もしかすると、ファリサイ派の人々の中にも、主イエスを真の預言者だと認め、慕っていた人々もいたのかもしれません。あるいは、逆に、彼らも主イエスを心の中で疎んじて、この町を出ていってほしいと思いその口実として、ヘロデの危険をあえて伝えたのかもしれませんが、しかし主イエスの安全を考えてであることは間違いありません。

 ところで、ヘロデが主イエスを殺そうとしていたというのです。彼は、あの洗礼者ヨハネに、神の御心に適わない結婚をとがめられて、牢屋に入れて、とうとう殺してしまった人物です。その背後にはその妻のへロディアがおります。なぜ、ヘロデは、主イエスを殺そうとしていたのでしょうか。彼がなぜエルサレムに上京していたのか。過ぎ越しの祭りを好んで、エルサレムにはたびたび来ていた。そしてそこで礼拝をささげていた。礼拝をささげて、わたしも神を重んじているという姿勢を取りたがったのでしょう。表向きは敬虔な人間を装う。そしてその裏では、自分の幸福を邪魔する者を平気で殺す。そのような男。それがヘロデ・アンティパスでありました。このような権力者のことを聞くと、あのロシアの大統領のことを思い出しますが、本当に神を信じて畏れている人と、信じているふりをしている人の違いは明白です。神を畏れる者は、人を殺すことなどはできません。戦争や、特殊な状況ならともかく、自分の利己的な都合によって他人を殺す者。そのような人の内には聖霊はとどまっていません。このヘロデ・アンティパスという男。彼は静謐を好んだそうです。だから自分の穏やかな生活を邪魔する者を殺したのです。私たちもまた、静かで、何にも邪魔されずに心を穏やかにして生きていけたら、どんなにか良いだろうと思います。信仰はそれをわたしたちにもたらしてくれるでしょうか。ある意味において、キリスト信仰に立つよりも、仏教の禅とか、アドラーの心理学とか。そういうものの方が、心の穏やかさ。ストレスフリーな状態を求める人々に対して、すぐに答えてくれるようなところがあると思います。しかしたとえそうであったとしても十字架の福音を信じることに意味がないと思う人はいないでしょう。わたしたちは安らぎを受けるために神を信じるのではなく、神を信じて歩むときに試練や苦しみ。損をするようなことがあったとしてもそれでもなお信仰を貫くことに、はるかに大きな意味があることを知らされているからです。しかし結果的に、聖書が伝えるまことの神を信頼して歩むときには、表面的な、処方箋的な心の安らぎではなく、わたしたちの全存在が喜びと感謝にあふれるような、本当の幸福を確信できるのです。あえて、このように問うことも許されていると思います。信仰は私たちに何を与えてくれるのか、という観点で信仰について考えることです。ハイデルベルク信仰問答はしばしば、そのように、信じることによってもたらされる益は何か、という問い方をしています。信仰は私たちに何をもたらしてくれるでしょうか。確かに、主イエスは私たちに平安を与えてくださいます！「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」（マタイ 11 章 28 節）この御言葉の語る約束は本当です。主イエスが罪の赦しを通して与えてくださる平安は、何よりも本質的で決定的な救いの平安だからです。誰も、罪の赦しなしに生きていける人などは本当はどこにもいないのです。キリストにある平安。それは、趣味に没頭するよりも、酒を飲んでほっとするよりも。何よりも確かな平安なのであり、わたしたちの生きる力となります。信仰によって与えられる安らぎ。それは表面的な一時しのぎの安らぎではありません。多忙な仕事やの責任や人間関係のしがらみを抱えてストレスを感じつつも、それでもなおその根底にある平安です。それは、罪の赦しと、神のものとされているということ。主が共におられるということです。それに勝る心の平安はないのです。そこにこそわたしたちは心のよりどころを求めてよいのです。

ここで、ある人がこんなことを語っております。信者に対して世の人々がする批判に、信仰などは弱い人が、逃げることと同じではないか、という批判があるが、そういう批判をする人に対して弁明などをする必要はないのだ。むしろ、私たちには逃げる場所があるということを誇ればよいのだ、と。さきほど、読んでいただきました詩編 61 編の 4 節から 5 節にこのようにあります。「あなたは常にわたしの避けどころ 敵に対する力強い塔となってくださいます。あなたの幕屋にわたしはとこしえに宿り あなたの翼を避けどころとして隠れます。」主イエスが 34 節で語っておられるのは、この詩編の御言葉が語る神の恵みです。主イエスは神の権威をもって、ご自身の下に来る人々の誰にでもこの古の詩人の物語る喜びを、喜んで分け与えたいのです。そのために主イエスは人となってこの地上に来てくださったのです。しかしここでは、主イエスがその御翼を広げて、ここに来なさいとおっしゃっている。その主イエスを殺そうとする者がいる。そしてそのような者が、神の民のふりをしているのです。だから主イエスはここで、嘆いておられる。悲しんでおられるのです。ヘロデのような悪党だけではありません。ここで主イエスと相対している、ファリサイ派のように、イスラエルの神への信仰を徹底させているはずの人々も含めて、神の民イスラエル全体が、神を信じます、大切にします、と言いながら、神に逆らっ

てしまっているということ。それが、ご自身を否むことを通して、はっきりと見えているからです。

２， 旧約の民の歴史

34 節で主イエスが語っている御言葉にもう少し集中していきたいと思います。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとはしなかった。」ここで主イエスが慨嘆しておられますように、旧約のイスラエルの民の歴史。それは、従順に神に従ってきた民の歴史ではありませんでした。むしろ、神に逆らった民の歴史と言った方が良いかもしれません。神に逆らい続け、その堕落した民に警告するために、神によって遣わされた預言者たち。その神の使いたちを殺し、反逆する。それがイスラエルの歴史でありました。だから北イスラエルは、滅び、南ユダも、バビロン捕囚という苦難に遭ってしまった。神の裁きがそのようにしてくだってしまった。その後、悔い改めて、律法を守ります、と誓ったのちにも、主イエスが来られたこのとき、私こそが神に仕える民だという人々が、神の御子を憎み、殺そうとする。こういうありさまであったのです。主イエスは、すでにヘロデでなくとも、エルサレムの人々がこの男を殺せ！と叫ぶ日が来ることをよくわかっておられたのです。人間の心が、どれほど病んでいるかを主イエスほどよくご存じである方はいなかったのです。エレミヤ書の 17 章の 9 節にこのようにあります。「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。心を探り、そのはらわたを究めるのは主なるわたしである。」これが、聖書が伝えております人間の罪の現実です。これはしかし、エルサレムのユダヤ人だけの話ではありません。私たち。この現代に生きる私たちもこの罪の中にあるのです。神様が私たちの内に来てくださるとき、私たちを聖霊の御支配の中に招いてくださるとき、確かな平安が与えられます。しかし福音は私たちを、単なる安逸の中にとどまらせるわけではありません。こたつの中でぬくぬくと過ごすように、自分の世界の中でまったりと時間を過ごし、あとは人生楽しくやりなさいなどとは言われません。主が与えてくださる平安の中で、主は新たに使命を与え、私に従い、私の栄光を現しなさいとおっしゃる。あえて荒野の道を歩ませるようなことをなさるのです。荒野の中で、なおそれでも消えることのない平安を与え続けてくださるのです。しかしそのように神に従うのを嫌だ、と言って、ヘロデのように自分の世界を邪魔する者を殺し、内なる霊をも殺すような歩みをわたしたちはしてはいないでしょうか。神様には救われたい。天国にはいきたい。けれどもわたしは変わりたくない。ここから動きたくはない。それは、主が私たちを御翼の陰に招いておられるのを拒否することに等しいのです。私たちには、逃げるところがある。避難所がある。それは、ギャンブルや、趣味や、お酒などといったような世の人々がよくしておりますような逃避ではありません。私たちの魂が本当に憩えるところ。そしてそこでしか得られない力が与えられる。それが、主なる神の御翼の内に憩うということです。しかし、主はそこで、私たちの霊を休ませつつ、そこで、また厳しい現実を見据える力をくださるのです。私の使命を果たしに行きなさい。そう言われるのです。主に従って生きるとき、わたしたちにはそれぞれ主からの使命が一人一人に与えられていくのです。そのように言うと、少し大げさに聞こえるかもしれません。そうはいっても私はもう年を取っている。もう現役で仕事もしていない。そう思うかもしれません。しかし、礼拝の最後に祝祷といって牧師が祝福を祈ります。その祝福「主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりがあなた方一同と共に豊かにあるように」という言葉と共に、主が、わたしたちをそれぞれの生活へと派遣してくださっているのです。そのような派遣とは、それぞれの場所で、主に栄光を帰して歩むための派遣であります。子供でも大人でも、年をとった人でも、そこにおいては皆、主の僕。主の弟子なのです。

３， 主イエスの嘆きさて、ここで主イエスが嘆いておられます、この嘆きは、ゴルゴダの十字架において頂点に達します。しかしそのときの主イエスの御言葉は、とりなしとなっている。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカ 23 章 34 節）救い主であり、神の御子である方を十字架にかけて殺す。ここにおいて、人類の罪は最も大きくはっきりと、その邪悪性が現われるのです。しかし、それを、赦してあげてくださいと天の父に叫んでくださる神の御子の愛が、私たちを包むのです。この御言葉がなければ、私たちは、宇宙ごと滅ぼされてしまうのかもしれません。そのような罪なのです。

４， 今も主はわたしたちを集めておられるこの十字架による主イエスの愛の言葉は、今もこの世界の罪を包みます。それゆえに、主イエスがその復活の恵みをもって、救われるべき人々を、その御翼の陰に招き続けておられる。その救いの働きは今も、続いているのです。主イエスはこの世界を救い続けておられる。しかし同時に、裁きはもう始まっております。主イエスを否む人々に、神は天からの御裁きを為される。しかしその地上での裁きもまた最後的なものではないのです。主イエスはここで、預言しておられます。「見よ、お前たちの家は見捨てられる。」主イエスが、これを言われたのは紀元 30 年ごろのことです。このあとエルサレムの都が、ローマのティトゥスという将軍によって滅ぼされることを見抜いておられたのです。ですから、ここで主イエスが続けておっしゃっている言葉。「言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」これはどういう意味なのかというと、主は、神の民のもっと将来を見据えておられるのです。このあと、エルサレムに入った主イエスに対して、人々は、ホサナ、主よ救いたまえ、と叫びます。そしてこの言葉を叫ぶのです。この時のことを語っているのではありません。なぜならこのように主イエスをたたえた人々は、そのあとすぐに、主イエスを十字架にかけて殺すからです。ですから、主イエスはこの時のことを語っているのではありません。もっともっと遠い将来。しかし確実に来る将来です。十字架において人類の救いの道が拓き、全世界に福音が伝えられ、世界の終わりが来るその時。キリストが再び栄光の姿を身にまとって来られ、世界中の選ばれた人々が、主の御翼の下に来るその時。主イエスを拒んでいた神の民。イスラエルの人々も、救われる日が来るのだ。そう預言しておられるのです。つまり、主イエスは深く嘆きつつも、そしてエルサレムの陥落する悲しい日を預言しつつも、しかしそれで終わりではない。エルサレムが再び自分を受け入れて、そして全世界の救いが完成する。その日をすでに見据えておられるのです。ここで主イエスが言われた言葉。「主の名によって来られる方に、祝福があるように」という言葉は、すでに、わたしたちの口から告白されております。ここにすでに神の御支配が始まっているのです。イエス・キリストに祝福があるように！主に栄光あれ！わたしたちがこのように告白するのは、私たちが主イエスの御翼の陰にあるからであります。主イエスがわたしたちを選び、ご自身の恵みの下に召し集めてくださったからです。だから、今、ここにいるのです。人類の罪の極まったところで、彼らをお赦しくださいと父に願う、その大いなる主イエスの愛の中に、私たちの人生の全体が包み込まれております。わたしたちの命の、初めから終わりまで、主イエスの祝福の中にある。だから、私たちはもうキリストを再び十字架にかけるようなことはしないのです。できないのです。私たちは、主の御翼の陰にあるのです。礼拝とは、毎週、生活の中で生じたさまざまな疲れを下ろしに、主の御翼の陰に憩うことであります。しかしその主の御言葉は現実逃避ではなく、厳しい現実に立ち向かう勇気ともなります。また、ここで私たちは日々、主の御言葉によって心砕かれ、その心を明け渡していきます。自分の自我を中心にして生き続けて、わがままに生きることはもう許されません。主の御前に、罪に気づかされ、日々、私たちの心は刷新していきます。私たちは、死ぬまで、この主イエスの恵みの中に生かされていきます。そして全世界が、そしてエルサレムが再び、「主の名によって来られる方に、祝福があるように！」と叫ぶ日が来ることを信じていきましょう。このあと、私たちは聖餐に与ります。ここにわたしたちの本当の慰めがあります。平安があります。主イエスの血潮によって神の子とされた平安。罪を赦された平安。主がこの聖餐を通してあらわしている神の国が、全ての人々を照らす日が来ますように。そして、この聖餐にここにいる皆さんすべてが招かれています。主イエスが招いてくださる、この喜びの招きに応じることを通してです。どうか、皆さんもその心を明け渡して、主の御翼の下に駆け寄ってい

ただきたいのです。そしてその生涯を、主イエスに従って歩んでいきたいのです。お祈りをいたします。

 教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。あなたを日々、悲しませている頑なさがあります。救われたい。しかしあなたには従いたくない。そのような頑なさ、自我を押し通そうとする罪の中で、神を愛していますと言いながら、主イエスを殺した人々のように、わたしたちも傲慢であります。自分の正しさに固執することなく、神様の霊の御声を聞く心を私たちにお与えください。あなたの御翼の陰に憩う、その中で砕かれて、あなたに喜んで従うものとならせてください。この御堂においてあなたが私たち一人一人に慰めと平安を与えてください。この地上の何よりも素晴らしい憩いの場所として、聖日の礼拝を待ち望むものとならせてください。御言葉を聞き続けることを喜ぶ心を与えてください。今日から始まりますこの一週間をあなたが豊かにお導きください。お一人お一人を、この地に祝福をもって派遣してくださいますように。心身に疲れを覚えておられる方々の上に。病と闘っておられる方々の上に、あなたの深い慰めがありますように。礼拝に集うことのできない兄弟姉妹のその生活の中にあなたが豊かに臨んでくださいますように。ここに集う求道者の方々に聖霊を注いでください。あなたと共に人生を歩む一人一人とさせてくださいますように。新しい年度の歩みをあなたが主権をもって導いてくださいますように。伝道者を新たに私たちの教会にお与えくださいますように。心よりお願い申し上げます。この言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン